研　究　だ　よ　り

研究だより

第　9　号　　平成16年12月24日

香川大学教育学部附属 坂出小学校

＜　目　　次　＞

◇ごあいさつ	1	◇文部科学省研究開発学校として	7
◇本年度の研究の重点	2	◇英語教育実践演習，読み聞かせ教室	8
２学期の研究授業から	2～7	◇あとがき	8

ごあいさつ

副校長　西浦雅弘（にしうらまさひろ）

本年度４月から国立大学法人が設立されました。国立大学法人香川大学という国立大学法人が国立大学である香川大学を設置するようになったということです。ですから，本校の名称も今まで通り，香川大学教育学部附属坂出小学校という国立の小学校です。しかし，附属学校園の教員の身分は，国家公務員から法人の職員，つまり非公務員になったわけです。職員の勤務条件等に関する権利義務の大まかなところは就業規則等により引き継がれています。当然ながら，附属校としての使命や日々の教育活動においては，今まで通りであり大きな変化はありません。新たに作成した中期目標・計画の達成に向けて，大学や地域との連携をさらに深めながら，研究や教育活動の推進を図っていきたいと思っています。

さて，本校では一昨年度より「21世紀を切り拓く『確かな学力』の向上」をテーマに研究に取り組んでいます。今年度は，「－『思考力』の育成に向けて－」をサブテーマとして掲げました。附属学校の研究は，公立学校のニーズに応える内容になることが，重要であると考えます。

平成14年に香川県教育委員会が実施した学習状況調査によると，香川県下の子どもたちは，各観点において高い正答率を示したものの，考える力を問うとされる問題の正答率は，一律に他の問題の正答率を下回っていました。考える力や思考力と呼ばれる資質・能力は，きわめて重要なものの一つであります。そうした資質・能力が基礎的・基本的な内容のレベルにおいても，十分に身に付いていないという結果が出たのです。平成16年に香川県教育委員会が実施した学習状況調査でも考える力や，意欲に課題があるという結果になっています。

また，経済協力開発機構（ＯＥＣＤ）が12月7日に発表した各国の15歳の総合的学力を測る学習到達度調査（ＰＩＳＡ）の結果でも同様な状況を示しています。実施４分野のうち読解力が前回の８位から14位になったのです。読解力の根幹をなすのは思考力です。これからの子どもたちに必要なことは，そのことに対して自分はどう思うのか，どうすべきなのか等，思考し，判断する力，そして，それを表現する力を育てることではないでしょうか。

今回，県下の先生方の教育課題をより明確にするため，本校で取り組んで欲しい研究内容についてアンケート調査を実施することにしました。附属学校の研究内容として先導的であると同時に，公立学校の先生方に関心のある研究に取り組むことが大切だと考えたからです。これからも全国的な動きや現場の先生方の教育課題に目を向けながら，研究の方向を探っていこうと思っています。

今後とも，本校の教育研究に対しまして，忌憚のないご意見と，温かいご支援・ご協力をお願い申し上げます。

●●● 21世紀を切り拓く「確かな学力」の向上 ●●●

本年度の研究の重点　―「思考力」を育成する学習指導―

研究部長　真鍋佳樹（まなべよしき）

本校は，「21世紀を切り拓く『確かな学力』の向上」をテーマに，これまで，測りにくく育てにくい，しかし，学力の中核を為す資質・能力である「思考力」の育成に焦点を当てた研究を進めてきました。最近の報道でもよく取り上げられております「思考力の低下」に対応した取り組みを続けてきたことが，私たちの，研究に対するささやかな自負となっております。

本研究においては，「目標レベル」「単元レベル」「授業レベル」「評価レベル」を設定し，一昨年度からの２年間で，実践を基にした各レベルの基本的な考え方を打ち立てることができました。「目標レベル」では，各教科，総合的な学習の時間で育成すべき「思考力」の系統性を踏まえた具体化。「単元レベル」では，教材開発とその組織の在り方。「授業レベル」では，支援概念としての「経験との結び付け」及び「思考様式の意識付け，転移・活用」の視点の確立。「評価レベル」では，年間評価計画の作成等の成果が挙げられます。また，「『思考力』を育成するトレーニングシート集」も完成することができました。

今，私たちが最も求めているもの。それは，１時間の学習指導の在り方に対する研究です。子どもたちの「思考力」を高めるために，どんな教材を用意するのか，それによって子どもたちはどう反応するのか，その反応の裏には，どのような思考が存在するのか，その思考を顕在化して吟味し合い，そのよさを一般化して，転移・活用を促すには，教師はどのように反応を組織していくべきなのか。来年５月の研究発表会でこの方法論を提案するために，私たちは，以下にご紹介する研究授業を積み重ねているところです。

2学期の研究授業から

国　語　科

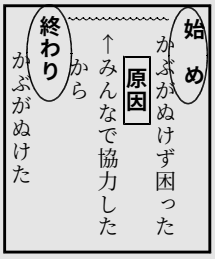
１年　おはなしを　げきにして　しょうかいしよう
―『サラダで　げんき』―

金﨑知子（かなざきともこ）

『サラダでげんき』は，１年生が初めて出あう長文の文学教材です。そこで，登場人物の出てくる順序や教えてくれる内容を正確に読み取ったり，場面の様子や人物の気持ちを豊かに想像したりする力を育てることをねらいとして学習を展開しました。「『サラダでげんき』の劇をしよう」という目的意識をもたせることによって，読む必要感をもつとともに，登場人物と同化し，その時の様子や気持ちを想像しながらより具体的に表情や動き，話す速さや声の大きさ，間の取り方などを工夫しようとしました。その中で，絶えず自分の想像や表現がどの叙述から生まれたものであるかを意識させ，その表現の仕方がふさわしいのかを吟味していきました。さらに，「全員が出られるように場面を増やすにはどうしたらよいのか」と考える子どもたちに，登場人物と教えてくれたものをまとめた板書や，読みの過程で見付けた具体的な様子や工夫を書き込んだ台本を見直す場を設定しました。「ねこはかつおぶし，犬はハム･･･どの動物も自分の好きなものだね。」と，人物と教えてくれた物との関係に気付きました。また，誰のセリフかが分かるように色分けしたカードを貼った台本を場面ごとに比べることで，「登場人物が何を入れるか，どんないいことがあるかを教えてくれる」そして「りっちゃんがそれに応える」という「くり返し」の文章構成のおもしろさを見付け，新たな場面を作っていきました。

5年　主題や表現の工夫について考えよう
―『注文の多い料理店』―

森山　敬三（もりやまけいぞう）



文学作品における主題読みにも様々な方法が考えられますが，本時はその中でも，「中心人物の変化とその原因から主題をまとめる」という思考様式を用いた主題読みに取り組みました。

授業の前半部では，『大きなかぶ』をモデルに，作品全体を右のように表した図から主題を考えさせました。「終わり」や「原因」の部分を変えながら，主題が複数存在すること，また，子どもから出された「協力したら，かぶは抜ける」「力を合わせたら，どんなことでもできる」という主題の異同，優劣を考える場を組織することで，「抽象的な言葉としての主題」の必要性を意識付けることができました。

いよいよ，『注文の多い料理店』の主題読みです。予定では，この後，子どもの考えた主題の意味や異同関係を全体で共有化し，図と主題との整合性という点から吟味させていくつもりでした。しかし，実際には「始め」と「終わり」のカテゴリーがずれていたり，「終わり」と「原因」の整合性が保てていなかったりしたため，急遽，予定を変更して，これらに関する学習の場を設定することにしました。

香川大学の山本茂喜先生からは，「因果関係による主題の設定」「抽象化」等について，本実践の価値と課題をご指導していただきました。

社　会　科

6年　明治の教育改革
―寺子屋から学制へ―

佐柳　仁（さなぎひとし）

社会的事象をその当時だけでなく，時間的に離れた出来事とも結び付けて考えることができるよう，明治の教育改革である学制の是非について，賛成派と反対派に分かれて討論しました。

「授業料の安い寺子屋ならば反対一揆も起きず，大勢の農民が学べたはずだ。」

「学制によって西洋の進んだ文化が学べたからこそ，文明開化できたんだ。」

このように初めは両派とも，学制の影響を明治初頭の出来事と結び付けて考えていました。

そこで，農民の生活（反対派）と学習内容の高さ（賛成派）という両派の主張が際立つように指名・助言し，「授業料が無料になる時期まで学制発布を待てばよかった」という折衷案を導き出しました。そして，この考えを取り上げ，発布の時期を年表上で実際にずらしながら，全体で話し合う場面をもちました。

「学制を出す時期が遅くなると，西洋の進んだ技術をもつ人も育たないから，工業の発展も遅れてしまう。」

「農民出身の野口英世も，学校で学べていなかったら，世界的な医学者になっていない。」このように学制のもたらした影響を明治後期の出来事とも結び付けて考えることができました。

３年　工夫がいっぱい！
スーパーマーケットで働く人

小西（こにし）　寛（ひろし）

「もっとチラシを出す範囲を広げればいいのではないか」見学や聞き取りを通してチラシの効果を実感した子どもたちがもった課題です。「１枚10円もかかるのにそんなに広げられないよ。」「チラシを見れば，来てくれてお店も儲かるよ。」など，様々な意見が出され，学級全体で意見の正当性，妥当性を吟味しました。その結果，見えてきたのは，「他地域のお店との関係」でした。実際に黒板上の地図で確認してみると，それぞれの地域にあるデパートや百貨店の存在が次々に明らかになりました。そして得た結論は「デパートの人は，他のお店のことも考えてチラシを出す範囲を決めている。」というものでした。これまで積み上げてきた「販売者」であるデパートと「消費者」である自分たちとを結ぶ思考に加えて「販売者」と「他地域の販売者」とを結ぶ思考ができるようになりました。

この授業は，香川大学の伊藤康裕先生にも参観していただき，「あらゆる地域から通学してくる附属小学校らしさを生かした授業。他地域についての視点を養うことにも意義がある。」というご指導をいただきました。

算　数　科

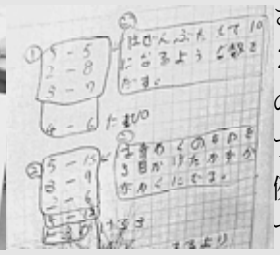
４年　変わり方
－ＢＢ君の変身をつきとめろ！－

三宅（みやけ）　永哲（ひさのり）

「ＢＢ君は，今，何に変身しているのかな。必ず当ててみせるぞ。」

子どもたちにとって，関数的な見方の扱いは，本単元が初めてになります。身の回りから２量の依存関係を子どもたちが主体的に発見できるようにするために，導入でＢＢ君（ブラックボックス）を用いました。そして，依存関係がすぐには分からない・見えない方法で，かつ，容易に気付ける程度のものを扱いました。

子どもたちは，例題から，何らかのきまりがありそうなこと，入出力値３組程度できまりが予想できることに気付きました。ところが，難しい問題に対し，任意の入出力値の組からは結果が予想できない壁にぶち当たりました。そして，「入れる数を１から順にしたら」と出された意見に従い，試してみることになりました。その結果，子どもたちは存在するきまり（表の横の見方）を見付け，任意の入力値に対する出力値を自信をもって発言することができ，「１から順に表にかいて調べる」というその整理の仕方のよさには気付けました。しかしながら，反省点として，次の２点が挙げられます。まず，試してみる前に「１から順に」のよさを広げるための吟味が十分にできなかったことです。次に「確かにそのきまりである」という確証には，事例に当てはめる必要があるのですが，その見方自体が初めての子どもには難しい内容となってしまったことです。



理　科

６年　生き物のくらしとかんきょう

長船（おさふね）　准児（じゅんじ）

本単元は，人や動物，植物が互いにかかわり合って生きていることを，食べ物，空気，水の視点から調べていく中で，多面的な見方や考え方を育てることがねらいです。中でも，「植物も呼吸をしていること」を捉える場面が，子どもたちにとって特につまずきやすい場面であると考え，授業実践をすることにしました。

「人と同じような呼吸をしているのでは？」「植物がでんぷんをつくるときに二酸化炭素を取り入れ酸素を出すことが，植物の呼吸というのでは？」子どもたちの予想です。こうした予想を，論理性，客観性のある考えに高めていくために，その背景にある理由を明確にするとともに，「こうしたら確かめられる」といった実験方法を考え，クラスで吟味する場を設定しました。実験後，「暗闇に置いた植物の周りの空気は，二酸化炭素量が増えているよ。」「植物は，呼吸（酸素→二酸化炭素）と光合成（二酸化炭素→酸素）の両方をしているみたいだ。」「でも，夜だけ呼吸をしているのかもしれないよ。」等，実験結果を基に自分の考えを修正したり，新たな課題を発見したりする声。

この学習を通して，動物や植物の共通性や差異性が明確になるとともに，自然界のつながりをより多面的に捉えることができたのではないでしょうか。

４年　もののかさと力

東条（とうじょう）　直樹（なおき）

「空気でっぽうの玉をもっと遠くに飛ばしたいなあ。」

本単元を学習する子どもの多くはそう願います。そこで，その願いを教材化し，圧し縮める空気のかさと玉を飛ばす力（圧し返す力）とを関係付けて捉えさせようと考えました。

子どもたちの見出した方法は「筒を長くする」「玉を変える」等でした。

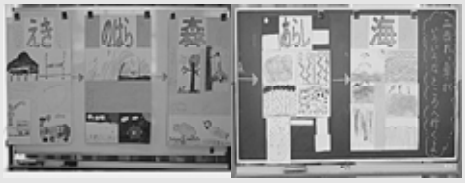
まずは，それぞれの方法の根拠を話し合わせ，実際に玉を飛ばす活動を行いました。そして，子どもたちは遠くに飛ばすことができた方法とうまくいかなかった方法の共通点や差異点について話し合いました。「空気のかさを増やすとよく飛んだね。」「反対に減らすと飛ばなかったよ。」それぞれの考えを「空気のかさ」に着目して関連させていくことで「たくさんの空気を圧し縮めること」と「空気が漏れないようにすること」が玉の飛ぶ距離に関係していることを捉えていきました。

空気を漏らさないように玉をジャガイモに変えて再挑戦。「パコーン」というものすごい音と今までの記録をはるかに超える飛距離に子どもたちは驚き，空気のかさと圧し返す力との関係を実感しました。

音　楽　科

２年　場面に合った音づくりをしよう
－２西れっ車で行こう－

久米（くめ）　亜弥（あや）



本時に至るまでには「国際急行列車」「出発」という鑑賞曲から，汽車の走る様子や周りの情景を思い浮かべる場を設定しました。すると，「だんだん弱く消えていくように聞こえたから，次の駅に到着したんだろう。」と強弱や遅速から情景に結び付けたり，「速く走っているのは，花畑に早く行きたいと思っているから。」「強い音がしたのは，たくさんお客さんが乗ってうれしいから。」というように汽車の気持ちから，情景をイメージしたりすることができました。

本時は，表現活動においても情景と結び付けて強弱，遅速について工夫はできないかと，各グループごとに汽車の軌跡を基に，より詳しい場面に合った演奏の工夫の仕方を考えました。海グループでは，「海の中へ行くぞという気持ちから強くしよう。」という意見と「海の中へ入っていく時は坂道を下るように力が必要ないから弱いよ。」という意見を基に場面に合った演奏の仕方について話し合いました。また香川大学の岡田知也先生からは，５月の研究会と比べてより多くの音楽的要素の工夫の仕方について考えることができていたが，今後は個の表現を一層重視しながら吟味の仕方を工夫するようご指導をいただきました。

体　育　科

５年　リズムに合わせてダンスを創ろう

宮﨑（みやざき）　彰（あきら）

「曲に合わせて動けない」「動きが単調になってしまう」等のグループの課題を解決するため，リズムのよさをダンスの中に取り入れた学習を行いました。

子どもたちからは，リズムのよさとして「リズムに合わせると体が動きやすくなる」「体がリズムにのって自然に動き出す」等の反応が出されました。

そして，自分たちが選んだリズムを基に動きを工夫し，グループの強調したい場面を相手に伝えやすくする方法について交流しました。

「リズムに合わせて，強弱の動きを加えたら，イメージが伝わりやすくなるよ。」「リズムが変わるときに動きを変えれば，おもしろい動きが生まれるよ。」

このようなアドバイスを基に「リズムに合わせて強弱をつけるのはすぐできてよさそうだな。」「このリズムの時には，対立しあう動きができそうだな。」等，課題解決のための手立てを容易に見出すグループが多く見られました。

香川大学の山神眞一先生からは，リズムのよさやイメージを共有させることや，ダンス経験を補うための支援の大切さ等をご指導していただきました。

体育科(保健)

４年　大人に近づくわたしたち

中村　美智子（なかむらみちこ）

思春期を迎え，これから体や心が大きく変化していく４年生。本単元では，これからの自分をイメージしながら成長や生活を振り返り，よりよい成長や生活の仕方を考える学習を計画しました。

「背が伸びない。」「どうしたら背が高くなるのだろう。」子どもたちは身長を伸ばすことに関心をもっていました。調べていくうちに「身長が伸びるのは骨が伸びているということだから，じょうぶな骨をつくることが大切だ。」という意識になり，骨づくりの生活（食事，運動，睡眠）の仕方を考えていきました。食事を考える学習では，Ａ・Ｂ・Ｃのランチからどのランチがよいかを話し合いました。「牛乳や小魚がありカルシウムがとれるからＡだよ。」「赤・黄・緑の栄養がそろっているからＢじゃないかな。」「好きな物だったらたくさん食べられるからＣがいいよ。」の意見が出ました。それに対して，「黄はエネルギーのもとだから骨づくりにはいらないのでは。」「じょうぶな骨をつくるには運動も大事だよ。それにはエネルギーがいるよ。」等，経験と結び付けて質問したり，考えを説明したりする中で，「カルシウムをとること」だけでなく「バランスのとれた食事」の大切さを見出していきました。最後に，各自がバイキング方式で選んでいた食事を２つの視点から見直していきました。

●●● 文部科学省研究開発学校として ●●●

実践報告

①　小学校６年生の中学校教育に対する適応に関する調査（小・中部会）

６年東組39名の子どもたちは，担任とともに，11月８日から２週間，附属坂出中学校に通学し，中学校という環境の中で，中学校教員の指導による学習を体験しました。小学校とは異なる指導法に，子どもたちも新鮮味やおもしろさを感じとったようです。

この体験入学の結果については，学園小・中部会が分析・考察を進めているところです。

②　５歳児及び小学校１年生の集団を基盤とした生活システム・指導システム・指導方法に対する適応に関する調査（幼・小部会，特別支援部会）

11月８日から５日間，附属幼稚園年長（青組）の子どもたち34名は，小学校で，体験学習をしました。今年６月に続く２回目の体験となり，子どもたちも少し慣れた様子で，小学校教員による学習指導を受けたり，小学生との交流をしたりしました。また，今回は，給食，清掃などの活動にも取り組み，小学校での１日の生活に，より近い形での実践となりました。

この結果についても，学園幼・小部会で分析・考察を進めています。

●●● 英語教育実践演習 ●●●

11月６，７日の両日，香川大学教育学部の英語研究室等に所属する３年生７名が，小学校の英語教育の現状と，実践を通しての指導の在り方を学ぶため，本校を訪れました。

前半部では，まず，小学校英語導入の経緯，そのねらい等について，次に，本校が取り組んでいる子どもの発達段階を踏まえた小・中学校連携のカリキュラムについて講義を行いました。

「ALT(外国語指導助手）が加わった授業では，担任はどのような役割を果たすのですか。」「小学校と中学校で指導方法にどのような違いがあるのですか。」など，具体的な実践を意識した質疑に，真剣に教師をめざす学生達の熱意を感じました。

後半部では，本校のカリキュラムに基づき，模擬授業に取り組みました。小学生への指導ということを念頭におき，身体表現を取り入れたり，繰り返し練習して定着する場を設けたりするなど，工夫が見られました。また，模擬授業後には，改善点について，熱心な討議が行われました。

わずか２日間の演習でしたが，学生達の成長した姿が見られました。　　＜文責　横川 勝正＞

●●● 読み聞かせ教室 ●●●

「先生。学校で読み聞かせをしたいのですが。」昨年度の３学期。保護者の方からの申し出によって，本校の読み聞かせ教室は始まりました。ボランティアで読み聞かせをして下さっているのは，現在11名のお母さん方。読み聞かせサークル等の経験のない方がほとんどです。初回の読み聞かせの後，メンバー募集の呼びかけの手紙を出して，「私もやってみようかな。」と集まって下さった方で，このメンバーは構成されているのです。

隔週の水曜日の昼休み。読み聞かせ教室の会場は，たくさんの子どもたちであふれます。最初は，低学年の子どもたちがほとんどでしたが，この頃は，高学年の子どもたちの姿もよく目にします。大型紙芝居や大型絵本も子どもたちには，大人気。読み聞かせが終わり，満足顔の子どもたちがいなくなった会場で，次回の相談が始まります。

お母さん方の熱意と行動力に影響されて，私も，子どもたちを前によく読み聞かせをするようになりました。　　＜文責　真鍋 佳樹＞

あとがき

「21世紀を切り拓く『確かな学力』の向上」の研究も３年目を迎えました。本年度はこれまでに構築してきた「目標レベル」「単元レベル」「授業レベル」「評価レベル」の研究を生かしながら，「子どもたちの反応をいかに組織すべきか」という課題に取り組んでおります。

思えば，本年度の本校研究会の授業討議におきましても，ご参会の先生方から「あの場面の話し合いで ○○という意見を効果的に取り上げていた。」というような反応の組織に関するご意見を多々いただきました。それだけ本課題が現在の学校現場で求められているのであろうと感じております。来年度の研究会で皆様のご期待に応えられるよう，研鑽に励みたいと思います。

編　集　委　員

真　鍋　佳　樹　　森　山　敬　三
三　宅　永　哲　　佐　柳　　仁
小　西　　寛　　東　条　直　樹

平成16年12月24日
香川大学教育学部附属坂出小学校
TEL　0877-46-2692　　FAX　0877-46-5218
E-mail　sakaide@ed.kagawa-u.ac.jp